



教職大学院 Newsletter

No. 5

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

2008.06.28

教師は何を教えるのか

福井大学理事（副学長，教育・学生担当） 中川 英之

福井大学教職大学院が本年4月に発足してから3か月が経過しました。学校拠点や地域拠点方式による実践の大学院教育という全く新しい教師教育システムの有効性が試されていると言えます。このシステムは、大学院の教員や院生が、小学校や中学校などの学校現場に赴き、現場の教員と協働して学校教育の課題解決に実践的に取り組む中で、学校改革や教職専門性に係る研究を進め、大学院生の高い教師力を育成していくことを目指しています。既刊の Newsletter からは、教職大学院担当の教員の方々、大学院生、そして学校現場の先生方の、「大きな夢を実現しよう」という強い決意と希望を読み取ることができます。力を合わせて、このシステムが発展的に機能していくように頑張ってくださいたいと願っています。

教職大学院教育や高等教育に限らず、広く教育に求められているのは、人間力の育成であり、教師力の育成もその一環であると考えています。人間力を構成するのは能力と意識です。養成すべき能力としては、コミュニケーション能力、論理的批判能力、創造的思考能力、協調的作業能力などが、また、意識としては、自律意識、協働意識、規範意識、責任感、学習感などがあり、時と場面に応じて様々な表現されています。能力の育成には技術的な手法を用いることができ、あまり成功していないようにも思えますが、教員の得意とするところです。コミュニケーション能力は、話読聞書のスキルを繰り返し教え込んでいくことにより、論理的批判能力は、物事の多面性を強調する中で、熟慮・

討論を仕掛けていくことにより、創造的思考能力は、物事の変化を連続的にとらえつつ如何なる到達点に至るかを考えさせることにより、協調的作業能力は、目標の設定、作業分担計画の作成、個別作業、結果の統合及び評価のサイクルを実行させることにより、学生・生徒の能力レベルを上げていくことができます。スキル教育は重要であり、教材の研究開発などの工夫は常に必要ですが、教師・教員は教育のこの部分で悩むことはないでしょう。しかし、意識教育の課題は簡単ではありません。個々の学生・生徒に向き合う必要があり、逆に教員の人間力が試されることとなります。意識は、家庭や学校などでの総合的な生活の中で形成されるものであり、これを育成するための具体的かつ直接的な方策はありません。しかし、意識の形成は、教育の中核であり、教育機関も教育者もこれを避けて通ることはできません。総合的であるが故に意識教育の結果を視覚化することは難しく、数多の誤解や曲解を生んできます。極端なものは、役に立つ立たない論ですが、誰にとって、何に対して、どういう範囲で、といった限定をはずした議論ほど危険なものはありません。勿論、専門的な鍛錬やスキル修得の努力の中でも意識は形成されていきますが、感覚の錯覚、習慣の過誤、思考の偏見、思想の過信といったものから個人が逃れるためには、もっと深いところで個人を救う意識形成が必要であると思っています。一つのキー・タームは、「孤立した個人をつくらない」見守り、ということでしょうか。

内 容

教師は何を教えるのか (1)

Staff 紹介 (9)

21 年度院生募集案内 (14)

教職大学院報道ファイル (16)

拠点校研究集会報告 (2)

院生紹介 (10)

教育実践と教育改革を考えるために (15)

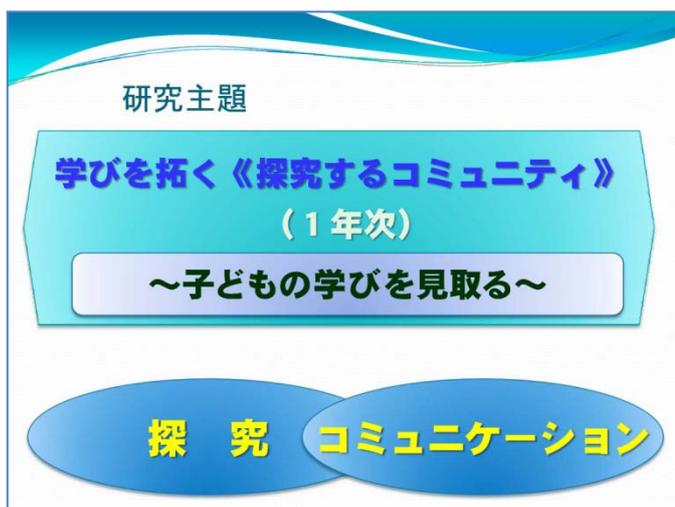
特集：拠点校研究集会報告 (附属中学校・附属幼稚園)

各拠点校では、日々授業や教育活動の改革に取り組んでいます。その成果を公開し、広く外部からの意見を伺う研究集会が開催されています。6月に行われた2校園の研究集会について、主催者側からとそれに参加した若い院生から報告をいただきました。

附属中学校:学びを拓く《探究するコミュニティ》6/4

公開授業オリエンテーション

福井大学教育地域科学部附属中学校教諭 (スクールリーダー養成コース) 高橋 和代



です。1年次のサブテーマは「子どもの学びを見取る」としました。この研究主題およびサブテーマについての詳しい内容は、午後の全体会で研究主任からご説明いたします。
子どもの筋で授業を見る

授業をしていると、子どもたちの学びが、時に言葉や表現などにより表に見えることがあります。また、表に見えないけれども仲間からの刺激を受け、学びは、とぎれたり、つながったり、深まったり、広まったりしています。今日は、どうぞ、表面に見える子どもたちの学びだけでなく、表面には見えない子どもたちの学びのつながりをも感じ取っていただけたらと思っています。授業者である私たちも、子どものこれらの学びを見取れるよう今日の授業においても努力します。「子どもの筋で授業を見る」中で、授業者が必要だと判断したとき、見取ったことを使って、専門的な視点からアドバイスをしたり、疑問を投げかけたり、学びをつないだり、そして、子どもたちが学べるように学習物を準備したり、学びの場の設定を考えたりします。

学びを拓く《探究するコミュニティ》

本日は、この福井大学教育地域科学部附属中学校にお越しいただき、ありがとうございます。

皆様、充実した日々をお過ごしのことと思います。今日また、さらに、この地、福井で、皆様と一緒に、授業についてお話し、教育について語り合えますこと、私どもは大変光栄にうれしく思っております。

3月に、新学習指導要領が告示され、これからの学校教育が目指す姿が示されました。

21世紀は、知識基盤社会といわれます。社会の変化に対応しながら、生じてくる課題を創造的に解決していくことが求められます。このような社会で子どもたちが将来生き甲斐をもって暮らすために、今、学校教育ではぐくむべきことは何なのでしょう？子どもたちの幸せを願い、私たちが中学校のあるべき姿を追い求めていく中で、常に自分たちに問い続けていることです。

私たちは、昨年度までの研究主題「探究するコミュニティの創造」から「学びを拓く《探究するコミュニティ》」へ研究の方向性を定め、歩み始めました。研究のキーワードも、やはり今までと同様「探究」と「コミュニケーション」



実践記録と学習展開案

このように、これまででも、私たちは「子どもの筋で授業を見る」ということに重点を置き、研究を進めてまいりま

した。そこで今から、「実践記録の書き方」「学習展開案について」「分科会について」の3点を中心に、お話しします。

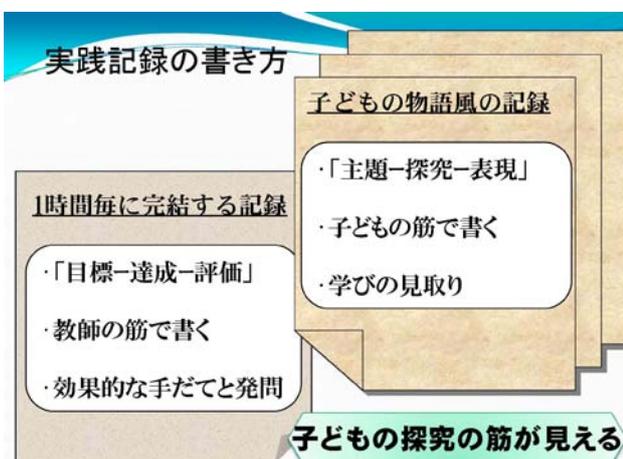
まず第1に、実践記録の書き方の特徴についてお話しします。

本校の実践記録の書きぶりにも「子どもの筋で授業を見る」という視点が表れています。それは実践記録を「子どもの学びを物語風に書く」ということです。お手元の研究紀要などにも、それぞれの教科の実践記録が掲載してあり



ますが、どれも、子どもたちの学びを中心に描いております。子どもたちの活動の様子や思考の流れを、言葉や表現をつなぎながら物語のように描いてみる。ストーリーをつなげようとする、「この言葉が出てきたのはなぜだろう」「なぜこんな行動を取ったのだろう」と授業を振り返り、考えながら書くこととなります。また、その物語を読み返したとき、書いているときには気付かなかった、物語の紡がれた縦糸と横糸に、書き手である授業者だけでなく、記録を読んだ読者も気付くことがあると思うのです。それらを読み合い語り合う中で、交流し、省察としてまとめ、次の実践に生かしていくのです。

これまでの実践記録は、1時間単位で教師側の授業の筋



で書かれ、まず学ばせたい目標があり、実践後、どれだけ目標を達成できたかを振り返り、新たな改善策を探るものでした。子どもたちに、目標を達成させるために、教師は授業を構想し、効果的な手立てや発問を考えていました。けれど、研究主題「学びを拓く《探究するコミュニティ》」に向かって研究している私たちは、先の物語風の書きの方が、子どもの探究の筋が見え、子どもたちの学びを見取ることができるようになって考え、このような物語風の記録の方法をとるようになったのです。

第2に、学習展開案についてお話しします。一般的には、学習指導案といわれているものです。それが、「教育研究集会要項の中に示されている学習展開案」と別冊子の「本時の学習展開案」の2部構成になっております。

本校では、子どもの学びがどう展開されていくかという考えから、学習展開案は、次のような項目になっています。まず、単元名を、子どもの学びの姿そのもので表したり、単元全体を貫く主題で表したりしています。それを私たちは動的ネーミングと呼び、学びの姿や主題を端的に表現するようにしています。単元設定の意図では、「なぜこの単元を学習するのかを教科の本質から授業者が分析したこと」や、「3年間のカリキュラムデザインの中でこの単元の位置付け」、「授業者の挑戦したいこと」等が書かれています。こうした授業者の単元分析や挑戦から、単元のねらいが作成されるという考えに基づき、ねらいは最後に書かれています。そして、本単元の学習がどう展開されていくのか、その前後にどのような単元がデザインされているのかを、時系列で示したものが、学習展開の計画と実際です。

学習展開の計画と実際

その、学習展開の計画と実際を、社会科を例にお話しします。本単元の前後にある単元は、直前あるいは直後の単元を示しているのではなく、3年間のカリキュラムの中で、特に関連が深いものを記載してあります。どのような理由で関連していると授業者が考えているかは、矢印につながるの意味が書かれていますので、参考になさってください。

もう一つの「本時の学習展開案」は、本時の展開構想について述べてあります。研究集会要項の学習展開案からは、授業が更に進んでおり、本時の直前までの「実際」を示してあります。特に、本時に関係ある部分を中心に記載しており、それに応じて「計画」が修正されている場合もあります。この社会科の場合では、主題設定までに時間が必要となり、計画よりも時間を多く使いました。そして、7次の学習予定を探究しながら学ぶことができると授業者が判断し、6次である本時の学習内容に7次の内容を含めました。このように子どもの学びに合わせて授業が変わるた

め、学習展開案を2部構成にし、本時の公開授業までの子どもの学びと、それに対応した教師の授業構想をより明確にしようと思いました。

それでは、本日公開されます授業について、その一部を紹介します。英語科では「What is "Fuzoku School Culture?" 『附中文化』についての思いを英語で伝え合う」という題材の探究学習が行われています。子どもたちは、この『附中』をどのようにとらえ、どのような思いで学校生活を送っているのでしょうか。『附中文化』について英語を用いて伝え合う中で、自分の『附中』での在り方を見つめ直していく授業です。技術科では「目指せ！.com エキスパート」という単元の探究学習が行われています。日々発展し、可能性を広げているインターネットを、より豊かな社会の実現のため、主体的に活用したい。コンピュータの双方向性を生かし、協働で情報通信ネットワークの仕組みや使い方を探究し、生活に生かしていく術（すべ）を発信していく授業です。

第3に、本日の分科会についてお話させていただきます。公開授業は、授業者をも含めた授業を見ている皆様方が、授業中の子どもの姿から見取ったことを語る中で、子どもの学びを交流する場でありたいと考えています。

そのため、分科会では、授業中のAさんの意見の役割について気付いたことを話したり、Aさんの意見が子どもた

ちのどういう思考の流れの中で出てきたのかを話したり、その時他の子どもたちは何を学んでいたのかを話したりして交流できるのを楽しみにしております。子どもたちの学びをつかむことは、教科を越えてどの授業者にも意味のあることだと思います。どうか、授業を参観される時、ある子どもや、あるグループの学びを追いかけ、学んでいることを見取っていただきたいと思います。それらの見取りが、分科会で交流され、子どもの学びの筋で授業が語り合えると、きっと有意義な分科会になると思います。教科の専門性や、習得と探究についても、子どもの学びの筋で語る中で表出してくると思うのです。

学年が上がるに従って、見取る長さが長くなるに従って、子どもの学びに寄り添うための情報量が多くなり、子どもの学びを見取ることは、複雑になってきます。そこで、前時までの子どもたちの学びと本時の学びをつなぐために、各授業会場にこれまでの学びの履歴が分かる「探究の歩み」を用意させていただきました。活用していただくと幸いです。

限られた時間ではありますが、この教育研究集会在、御参観の先生方に、実りあるものとなりますことを、切に願っております。この出会いに、私ども一同感謝しております。どうぞ、一日よろしく申し上げます。

福井大学教育地域科学部附属中学校 第43回 教育研究集会を振り返って

福井大学教育地域科学部附属中学校教諭（研究主任） 竹澤 宏保

毎年、恒例となっている附属中学校「教育研究集会」も今年で43回を数えることとなり、今回も県内外から450名（内福井大学学生・院生約200名）を超えるたくさんの方々に、お集まりいただいた。このところ、県外からの参観も増加傾向で、北は札幌から南は鹿児島まで、全国様々な地域から、この福井の取組を見に来られた。福井大学教職大学院の先生方にも多数参加いただき、研究に対する貴重な御意見を頂戴した。深く感謝申し上げる。

さて、今回の研究集会は、43回の歴史の中でも、一つの節目の集会であった。本校の研究は、5年のサイクルで研究をまとめている。今年はこちらの節目に当たり、新しくⅧ期研究をスタートさせる年次である。新主題は『学びを拓く《探究するコミュニティ》』。全体会でもその経緯を説明させていただいたが、参観いただいた先生方の目に

はどのように映ったのであろうか。機会があれば、御意見なども伺いたい。このテーマには5年前のような「探究するコミュニティ」というセンセーショナルな印象はない。しかし、この「探究するコミュニティ」こそ、この附属中学校がこれまでも、そしてこれからも追求していく不易の姿だと確信を持って、この研究主題を設定した。

今回の研究集会では、その一年次のサブテーマである「子どもの学びを見取る」を強調した。これからの5年間、もう一度「探究するコミュニティ」と正面から向き合うために、子どもたちが探究活動の中で、何をどのように学んでいるのか、そして私たちがそれらをどのようにつかみどのように子どもたちに返してやればよいのかという、教育活動の原点を明らかにしておきたかったからである。

そのため、すべての授業で、「探究の歩み」と題した子ど

もたちの学びのつながりを読み取ることねらった資料を用意し、子どもたちの思考が表出し絡み合うことが期待できる場面を本時として設定した。子どもたちの学びをていねいに見取るためには、それなりの時間も要する。連日遅くまで、本校先生方には御苦労をかけたが、そこでの見取りが、それぞれの自信となって授業に臨まれたに違いない。

教育研究集会後、本校の校内研究会(教育実践研究会という)で、今回の研究集会を通して、自分たちの取組を振り返った。その中で、もう一度、自分の授業や研究会の在り方をとらえ直した発言も多く聞かれ、この研究集会が自分たちの研究活動にとって、足元を固める有意な集会であったことを実感している。

そこで、ぜひとも、参観された先生方をお願いしたいことがある。非公式な場面で、機会をとらえて、授業をご覧になっての生の感想を授業者に伝えてあげてほしい。授業者も自分の取組に対する反響を楽しみにしている。なぜなら、そのようなやり取りの中で、新たな展望のヒントが見えてくるからである。

附属中学校研究大会に参加して

6月6日、附属中学校の研究大会に参加した。最初に行われたオリエンテーションでは、研究主題である「学びを拓く《探究するコミュニティ》～子どもの学びを見取る～」についての説明と授業参観の視点、授業研究会の意義についてお話していただいた。その中でも私が特に印象に残っているのは授業参観での参観者の視点である。

私は、インターンシップで至民中学校に行っている。授業を参観するときは、授業者がこの授業で一体何をねらっているのか、そして授業者がどのような意図を持っているのかを考えながら参観している。しかし、今回の研究大会で参観者は、グループ活動は一つのグループに絞って見ることで、そのグループの思考の流れや個人の思考の変化、グループやその中の個人の学びのプロセスを感じ取ってほしいとお話していただいた。研究主題にある「子どもの学びを見取る」ということは、子ども一人一人がどのように考え、そしてどのように学びを深めているのかを、教師が寄り添い、感じ取っていくことなのかと自分なりに考え

私個人としては、秋田、鹿毛両先生の私の授業の中での子どもたちのエピソードを元にした子どもたちの学びの解釈にひたすら驚かされた。授業者としても、その授業の中で巻き起こるエピソードをある程度予測していたが、私の予想をはるかに超える解釈であった。授業者と参観者の学びの見取りは異なるのは当然だが、子どもの学びを見取ることの奥深さを改めて感じた。学びを深く見取るためには、観察眼を鍛えるための普段からの取組や見取る素地を提供する単元の展開や表現の場の工夫が必要であり、いずれも取り組むべき価値のあるものである。つまり「学びを見取る」ことを基軸に次々と研究が発展していくことになる。

また、たくさんの課題も頂戴した。その内容を吟味しながら、子どもたちの学びを拓き、教師の力量を高める成熟した探究するコミュニティを目指していきたいと思う。

最後に、重ねて、本研究集会に足を運んでいただき、御支援や御助言をいただいたすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

教職専門性開発コース 黒川 清貴

た。またそれらの具体的な子どもの様子を分科会で共有することにより、授業者が授業研究する上で非常に重要な観点になると考えられる。子どもたちがどの場面で、どのように考え、そしてどのように学びを深めているかということ、授業者がしっかり把握することで、そこから良かった点や改善点を発見し、今後の授業に生かすことができるからだ。参観者に子ども一人一人の学びを感じ取ってほしいということから、附属中学校がいかに子ども一人一人の学びを大切にしているのかを実感した。

公開授業Ⅱでは、大正先生の数学の授業を参観した。単元は空間図形で、班ごとに7つの立体を仲間分けしようという活動だった。立体は、前時に子どもたちが作っている。授業後の分科会で挙がったことであるが、子どもたち自身が立体を作り、実物を使って考えることによって、見取図を使って仲間分けする場合には絶対に出ないような疑問が子どもたちから数多く出されていた。例えば、三角柱の底面は、立体の最も長いところを高さにして、立てた底面

だろうかや、八面体はどうやって置くのだろうかなどである。自分たちで立体を作り、それらを基に考えることで、子どもたちに新たな問題意識が生まれる。それらを今後の授業の中で解決し、探究し表現していく。これが附属中学校の行っている探究型の授業なのだと感じた。そしてこの過程は、至民中学校が行っている問題解決型学習と似ていると感じた。至民中学校では、子どもたちが教師から与えられた課題に対して考え、新たな問題意識を持ち、自分たちが課題を考える上で新たな問題を発見し、それを解決していくという問題解決型の授業を行っている。子どもたちが自ら問題意識を持ち、それを解決していくという過程が、2つの中学校の授業に共通していると感じた。

シンポジウムでは鹿毛雅治さんがお話しされた、子どもを見取るためには、参観者が子どもの様子をどう解釈するのが重要になるということが、強く印象に残っている。授業中の子どもの様子を見てみると、そこには子どもの発

言や態度といった事実があり、そしてその事実を解釈する参観者の考えがある。参観者が事実と解釈をはっきり区別し、授業者に授業中の子どもたちの様子を伝える必要があると感じた。というのは、子どもの様子を参観者が解釈するとき、子どもたちの発言や態度に対して様々に考えることができるからだ。子どもたちの思考を、簡単にまたは完璧に読み取ることはできないと思う。しかし、多くの先生方の視点や考えが集まることで、子どもたちの思考の流れや学びの過程を、より深く読み取ることができるのかと感じた。

附属中学校の研究大会に参加し、私が今まで考えていなかったことに気付くことができた。これは先生方のお話や授業後の分科会などを通して、自分自身に振り返ることができたからだと考える。今回の研究大会で考えさせられたことや得たものを、今後のインターンシップに生かしていきたい。

附属幼稚園：伝えあう ひびきあう 6/14



平成 20 年度 公開保育を振り返って

福井大学教育地域科学部附属幼稚園教諭 (スクールリーダー養成コース) 林 幸恵

6月14日晴天の元、附属幼稚園の公開保育が開催された。休日にもかかわらず多数の参加があり、制限人数を超える

約 200 名の参加者だった。若い保育士の方から、小学校、特別支援学校の方まで、様々な分野の方が参加されたよう

である。狭い園舎・園庭内は、人、人、人といった具合だった。

本年度から新たに研究テーマを「伝えあう ひびきあう」とし、4月から研究を進めてきた。新たな研究テーマになり2か月余りであるため、今回の公開保育では、これからの研究の方向性を示し、御意見を伺うことを目的とした。

午前の保育参観では、3歳児がウサギと遊ぶ姿や砂場でダイナミックに遊ぶ姿、4歳児がサッカー広場でごっこ遊びを楽しむ姿、5歳児が園庭でリレー遊びや保育室で自分たちの作ったランドに下学年児の招待する姿など、幼児が自由に遊ぶ中で、友達とかかわり思いを伝え合う姿を参観していただいた。参観者の群れをかいくぐるようにして遊ぶ幼児だったが、萎縮することなく、普段どおりに思い思いに伸び伸びと遊ぶことができていた。参観者の感想から「異年齢の交流が自然にでき、幼児なりに友達に思いを伝える姿が印象的だった」「教師が一人一人の幼児を丁寧に見取り、温かで穏やかに接しているのが良かった」「普段からの保育の積み重ねで、幼児の中にルールがきちんとできていることがすばしかった」などが上げられていた。また、好きな遊びの後の学級一斉の時間では、各学年に応じた遊びの振り返りの話し合いの時間を参観していただいた。「各学年に応じた話し合いの形態が取られ、幼児が友達の話じっくり聞く姿が良かった」という参観者感想があった。好きな遊び、学級での時間を通して、幼児同士のいざこざもいくつか見られた。附属幼稚園ではいざこざの機会を大切なものとしてとらえている。幼児同士がお互いに思いを出し、自分たちで解決していく力が付く機会であるからである。当事者同士のみならず、そこに第三者が加わることで幼児同士が解決していく姿が、公開保育でも

見られたようである。教師の一步引いて待つ姿も参観者に見ていただくことができた。

午後の全体会、分科会では、研究テーマに沿った話し合いがなされた。

全体会では、コミュニケーション力の側面、発達の側面、幼小学びの連続性の側面から、助言者の先生方の助言をいただくことができ、本園職員はもちろん、参加者にとっても意義ある時間となったと思われる。

また、分科会では、附属幼稚園の普段の保育の中で、各学年の「伝えあう ひびきあう」場面をビデオに撮り、その場면을参観者に視聴していただき、バズセッションを行った。助言者、協力者の先生方にもバズグループに入って話し合いに参加していただき、気軽に話し合いがなされたことは、好評であった。話し合いでは、日ごろの保育の悩みも出てきて、参加者は同じ悩みに共感し、自分の日ごろの保育を見直す機会になったようだ。

研究テーマがかなり大きく、果たして公開保育までに本園の研究の方向性が出せるか、好きな遊びの中で「伝えあう ひびきあう」幼児の姿が見られるのか、学級の時間の持ち方はどうかなど、課題山積で望んだ公開保育だった。しかし、これまで本園が取り組んできた保育を参観者に認められた手ごたえを、今回の公開保育で感じることができ、これからの方向性も見えてきたように思う。

今回の公開保育で出された課題や意見を今後の研究に生かしていけるようにしたい。附属だからこそできること、また附属だからこそ示していかなければならないことがある。附属の使命なのだが……。来年度の研究集会では、「伝えあう ひびきあう」の研究の成果が形となって現れるように、新たな研究のスタートラインに立っている。

附属幼稚園の研究保育をインターンの立場から参観して

教職専門性開発コース 木内 彩乃

今回の研究保育が、私にとって幼稚園を参観する初めての機会となった。普段幼稚園児とかかわる機会がないので、どのような保育が行われているか全く想像することができなかった。しかし、実際に参観してみると、私にとって勉強になることがたくさんあった。私は、週3回附属特別支援学校にインターンとして通わせていただいていた

ため、その2校園での活動の共通点という観点から今回の研究保育を考えてみようと思う。

まず挙げられることは、「環境や場面の設定」という点である。子どもたちは、様々な事柄に興味や好奇心が旺盛で、ちょっとしたことがきっかけになってそれまでの集中が途切れてしまうことが多い。幼稚園では環境の設定をし

っかりと行い、子どもが伸び伸びと遊びに入り込めるような工夫がたくさん見られた。例えば、魚釣りごっこ・パーベキューごっこの場所と、身体をたくさん動かすリレー遊びなどを行う場がしっかりと分けてあることや、教室の中でもプラスチック製ダンボールでコーナーを自由に仕切れるようになっていたことなどである。このような環境の設定を行うことによって、子どもたちはその場で内容に合った行動をとり、遊び・学びの場が広がっているのだと思う。2つ目の共通点は、子どもからの言葉の表出を大切にしながら活動に取り入れているという点である。ごっこ遊びの中では、お客さんと店員さんの会話やり取りの中から「何がほしいの?」や「しっかり目を見て最後まで伝えよう」など子どもたちの言葉や会話での態度をはぐくんでいく先生方の支援が見られた。また、遊びの時間が終わった後に一人一人が挙手をして、何をして遊んだかを友達に伝える場面があった。そこでは自分の伝えたいことを自分の言葉で伝えること、また友達の意見を聞き、認め合う姿勢が作られていくのだろうと考えた。うまく言葉が出てこない子どもに対しては、先生方が優しくリードされ、言葉を引き出していく場面も見られた。3つ目は、先生方が1日の活動の流れを意識してかかわっておられた点である。特別支援学校でも、活動と活動のつなぎ目の時間がポイントになっていると感じる場面が多くあるが、幼稚園では集団

での行動をスムーズに行うことに特に配慮されているように感じた。子どもたちは飽きやすく、2、3人の子どもの集中力が途切れると集団全体に落ち着きがなくなってしまうようだった。しかし、遊び→片付け→おやつ→歌→紙芝居と子どもたちが飽きてしまわずに楽しめるような流れがしっかりあり、それを先生方は言葉掛けだけではなく、御自身の姿・行動を子どもたちに見せ、次は何をする時間かを伝えることなども意識してかかわっておられたように感じた。

先生方は1クラス 20 人の子どもたち一人一人を大切にされていて、本当にお忙しそうであった。しかし、誰がどこでどのような遊びをしているかをしっかり把握されていて、模範となる行動や発言をした子どもを他の子どもたちの前で褒めることをたくさんなさっていた。それは、お互いが認め合うこと、次の活動に望ましいかかわりを育てることにつながっていると思う。一見、子どもたちに自由に遊ばせているように見える活動の中にも、子どもたちの学びの場面はたくさんあり、それを引き出しておられる先生方の姿は私にとってすごく刺激的だった。私も、子どもとのかかわりの中に取り入れられるところを積極的に取り入れ、先生方のように子どものサインを大切にできる教師になりたいと感じた研究保育だった。



Staff 紹介⑤

教職大学院には様々な分野で実践と研究を重ねてきているメンバーが集まっています。そして、多様な視点と位置からこの教職大学院を支えていきます。そうしたスタッフそれぞれの固有の実践と研究の歩み、教職大学院に寄せる期待、これからの展望について語ってもらいます。第5回は、教職開発専攻長の寺岡先生です。

寺岡 英男 たらおか ひでお

1977年に福井に来て、はや32年目を迎えました。専門は教育方法学。私の育った研究室は、授業の法則性を探るために、認識過程に着目し、教育内容や教材を再構成する中で、子どもの概念形成過程を明らかにする方略をとっていました。その背景には、数教協や仮説実験授業などの民間の教科研究の優れた成果がありました。その方略を支える理論として、ヴィゴツキーやダヴィドフ、岩崎・宮原の『科学的認識の理論』などがありました。私も、「ニュートンの三法則」の「授業書」を作り、学校で実験授業をやってもらっていました。

福井に来てからも、民間の教科研究とのかかわりは続いています。初期のころ、教育工学センターからの切替えは福井が最初だった教育実践研究指導センター（現教育実践総合センター）の専任に数教協の高校現職の採用人事があったり、県内の先生に非常勤をお願いしたりしました。実務家教員の採用が極めて稀な時代、学部には先駆けの土壌がありました。

しばらく経って、森、松木、柳澤、寺岡の4人のメンバーがそろい、ゼミで伊那小の実践記録を読んだり、附属小の研究部の先生とペアで授業の共同研究に取り組んだりしました。附属小では研究の領域として総合、表現、情報の3領域を設定するなど、学習指導要領を超えた実践と研究が芽生え始めましたが、そのこともあり共同研究は一次途絶えました。80年代末から90年代初めのころです。授業研究の分野でも「教材観の転換」が言われ、教育内容・教材の再構成を中心にした研究だけではなく、教師の教授行為や学習者の側面から授業をとらえることの重要性が改めて提起される時期でした。当時の動向を示すものに岩波

講座『教育の方法』などがあります。

認知心理学での情報处理的アプローチから状況的アプローチへの転換もこの時期に重なるものです。



このころ、柳澤さんが伊那小の実践やデューイの理論をもとに学習過程の展開のプロセスを提起しました。それに注目してくれたのが当時の附属中の研究部で、附属中とはそれ以降、今日に至るまで協働研究が続き、教師教育研究や大学院改革の中核になっています。その後、学校週5日制を契機とした私たちの自前のフィールドとしての探求ネットワーク、生涯にわたる高いレベルの教育の機会の保障にこたえる大学院公開講座やその発展としての夜間主・学校改革実践研究コースの設置へと続き、今日の教職大学院に至っています。

今の教職開発専攻の枠組みに結実するこうした省察的実践は、4人組で進められたのですが、私はその中で一番早く来て年長でもあるにもかかわらず、ずっと「遅れてきた青年」ならぬ「成年」でした。学校や大学というシステムの改革、そのための学問研究の再構築と実践化を目指す、極めてスケールの大きな構想力と緻密な省察実践力、組織力について、感心しながら付いてきた次第です。

教職開発専攻では、教員に求められる専門的力量として、

①学習と成長を支えるファシリテーター・コーディネーターとしての実践力、②学習の協働組織とその改革のマネジメント力、③実践の質を不断に高め発展させていく省察・研究能力、④公教育としての学校を担う専門職としての教員の理念と責任を挙げています。これらの教師の力量は大学教員にも例外なく求められるものとして、これまでの改革の取組の中で試されてきたものであるわけです。

自分のささやかな歩みを振り返りながら、最近つくづく思うことがあります。それは、かつて自分の「とりつく島」であった理論や課題が、新たな意味付け・関係付けの中で質的に発展した形で再び現れてきていることです。授業研究をやり出したころのヴィゴツキーは、今、新ヴィゴツキー学派として。「教育内容の現代化」のときは批判的にとらえる存在でもあったブルーナーの、相互交流的な共同体としての学びや文化への参加という考えを示すに至る、氏自身の長い省察的研究の軌跡への感動。さらには、民間の

教科研究のスローガン「すべての人に高いレベルの科学を」は、今日、世界的に、持続可能な社会の実現のための「Science for All」という立場からの、探究や科学の社会的機能をも組み入れたカリキュラムづくりに発展し、その一つの現われがPISAのリテラシーとして提起されているものであるということ等々。

新しい社会変化の中から創設された教職大学院。ここで、デューイの言う「学校の変革を考える場合、いつも決まりきっているような考え方では、その程度の水準でしか学校の変革は行われぬ」ことを肝に銘じなければならないと思います。社会の求める新しい水準での改革のために、新たなリテラシーの形成とそれを営むコミュニティとしての学校を創り出していくこと。スタッフや院生の皆さんとともに、教職大学院の任務を大きく見据えながら緻密に進める取組に、後れないよう付いて行きたいと思います。

院 生 紹 介 ④

東 昌 弘 あずま まさひろ

(越前市神山小学校)

越前市神山小学校で臨時任用講師をしている東昌弘です。今年度で臨時講師3年目になりますが、それまでは銀行に13年勤務していたので、教職専門性開発コースの中では最年長の院生となります(6月で40歳になってしまいました)。一昨年度は、越前市武生第一中学校で、外国人生徒に日本語指導をしていました。ブラジル人、タイ人、フィリピン人という中で、ポルトガル語、タイ語、タガログ語、英語の辞書と格闘しながら過ごした日々は今となってはいい思い出です。昨年度は、越前市武生第二中学校坂口分校で国語の指導をしていました。全校生徒14名の小さな学校でしたが、豊かな自然の中で家族のように過ごす

ことができました。そして今年度は、越前市神山小学校でTT指導をしています。主に4年生のクラスに入っていますが、2年生から6年生までほとんどの学年の授業に顔を出すことができ、学ぶことが非常に多い毎日です。



私が学校で臨任講師として勤務していてふと疑問に思ったことがあります。それは新採用の先生方には指導教員がついて、授業の構想や進め方、事務処理の仕方など、学校生活に必要なことを丁寧に指導を受けていますが、私たち講師は学力も指導力も不十分でありながら、何の指導も受けられずに自己流の授業をせざるを得ず、子どもたちに対して申し訳ないなと思いつつ教室に入っていました。そんな現場の矛盾を感じていた時、教職大学院のことを知って、「これだ!」と思いました。大学の先生方が学校に来てくれて実践指導を受けられることは、正に自分にとって

待ち望んでいたものでした。

教職大学院に入学して3か月が経過し、まだ、自分の研究の方向性も見えず、手探りの毎日ですが、勤務校で自分の授業を先生方に見ていただいたり、合同カンファレンスでいろんな先生方の実践を聞いたりすることで、今後より一層教育に対する考えを深めていけるのではないかと考えています。また、大学の先生方やストレートマスター、臨任講師、スクールリーダーの先生方と交流できることも、今後の自分の人生の中で大切な財産になるものと確信しています。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

高橋 和代

たかはし かずよ

(福井大学教育地域科学部附属中学校)

6月6日に、私にとって4度目の教育研究集会を終えることができました。今年度の研究主題は「学びを拓く《探究するコミュニティ》」サブテーマ「学びを見取る」に向けて実践していることを発表しました。今年度もたくさんの先生方、仲間、家族に支えられていることを再認識し、感謝の気持ちでいっぱいになりました。今は、この気持ちの良い疲れに身を任せていたい気分です。でも、附属中はその歩みを止めることを許してはくれません。それは学ぶ意欲に満ちている子どもたちが、そこにいるからだと思います。

2年生の細川和希君が、研究集会の英語の授業を終えて、学年便りに次のような文章を書きました。

「今回の研究授業では附中文化についての紹介文を書きました。3年生の書いた紹介文を参考に、どの班も先輩の文章のよいところを見つけて、自分たちの班の紹介文をよいものにしていました。この授業を通して、僕たちは他の人のよいところを見つけ、それを参考に自分たちのものをよくしていくことのよさを知ることができました。」

私は細川君の文章の内容に驚きました。あんなにたくさんの参観者の中で授業を行い、緊張したであろうと私は思っていたのに、そのことに関する記述はなく、みんなで学ぶすばらしさをつづっていました。授業に主体的に取り組む、お互いに影響し合い、学ぶということは、子どもたちにとって意味のあることなのでしょう。学ぶ意味を子どもたち自身が見付けたとき、授業の感想が上記のような内容にな

るのは自然なことなのかもしれません。私もこのような授業ができるよう、努力していきたいと思いました。



そして、私は、大人も子どもも学ぶことに関しては、同じだなあと感じています。いろいろな人の意見をお聞きしたり、私の考えていることを聞いていただいたりすることで、自分の考えが整理され、新たな視点をいただいたり、更にこうやってみようという考えを深める方向性が見えたりします。「お互いに影響し合いながら学ぶこと」で、今まで、無意味と感ずることは一度もありませんでした。本当に勉強になりありがたいことでした。後は「主体的に取り組む」ということです。多用のため…、実務が…、年齢による…など、弱気になることもありますが、研究のために優遇されている附属中の私が、こんなことを言ったら申し訳ありません。細川君のように学ぶ意味を語れるようにならなくては!

教職大学院の皆様の明るいエネルギーに刺激をいただき、先生方に支えられ御指導いただき、子どもたちの将来の笑顔のために頑張りますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

鈴木 秀卓 すずき ひでたか

(坂井市立丸岡南中学校)

本年度、教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学した丸岡南中学校教諭の鈴木です。

まず、私が勤務する本校についての概要を簡潔に紹介します。本校は、平成18年4月、県下初の教科センター方式として開校した学校です。教科センター方式とは、すべての教科がそれぞれの専用教室とメディアセンターを持ち、必要な教材を常設することにより教科特有の学習環境を構成することができるシステムです。生徒は毎時間、各教科専用の教室に移動して授業を受けることになります。メディアセンターとは、各教室に付帯するオープンスペースのことで、教科ごとに各学年の学習の足跡(学習物)が蓄積されており、そのような掲示物から生徒自らがいろいろなことを学び取ることができる空間です。さらに、必要な図書・プリント・資料・情報機器などの教材が用意され、授業の流れに応じて自由に使うことができます。また、各教科の教師の主な居場所となるため、生徒の質問や相談に気軽に応じたり、生徒の自主的な学習を援助したりする場となります。

このような特色を持つ本校は、今春から教職大学院の拠点校となりました。そこで、研究主任の私は、大学院入学のお話をいただくことになったのです。正直なところ、最初は入学に対し、とまどいと迷いがありました。しかし、大学院で様々なことを学ぶことができ、また、大学院の先生と協働研究できるということは、私自身にとっても、本校にとってもたいへんプラスであると考えました。そして、



入学を決意しました。

集中講義開始から、約半年が経ちました。集中講義やラウンドテーブルおよび合同カンファレンスなど、これまで受講してきたものは、本当に勉強になっています。また、それぞれの立場は違うものの、月に1度ないし2度程度、顔を突き合わせて会話ができる18名の同期の先生方と出会えたことは、うれしい限りです。

教職に就き、約20年を経過しようとしている自分にとって、たいへんよい機会を与えられたと満足しています。また、本校の研究をコーディネートする立場にある自分にとって、自信をもたせてもらったような気がします。今後も、大学院のスタッフの方々や同期の先生方から、たくさんのエキスを奪い取り、自分の、そして本校のエキスをしようと考えています。皆さん、エキスをたっぷりいただきます。これからも頑張ります。よろしくお祈りします。

田上 博一 たがみ ひろかず

(福井県特別支援教育センター)

私が勤務している福井県特別支援教育センター(以下、当センターとする)は、特別支援教育への転換に伴い、平成19年4月に名称を変更して、教育的ニーズのある子どもを対象に、教育相談や指導を通して支援を進めています。

平成19年4月、学校教育法が一部改正されて施行されました。障害のあるすべての幼児児童生徒の教育の一層の充実を図るため、従来の特殊教育から特別支援教育へと転

換が図られました。平成14年度文部科学省が実施した「通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児



児童生徒に関する全国実態調査」の結果、LD、AD/HD、高機能自閉症等の疑いのある児童生徒が6.3%在籍している可能性が示されました。この結果から、教育的支援を必要とする児童生徒は、ほとんどの学校に在籍していることが予想され、実際に、当センターが園や学校、保護者から受ける相談は増加しています。

数年前から、園や学校で行われる校内研修の講師として特別支援教育に関するガイダンスをさせていただくことが増えてきました。先生方の前で話をすることは、今でも緊張します。研修の中で「発達障害のある児童（生徒）はいますか？」と尋ねるとゆっくりと数名の手が挙がります。「授業中落ち着きのない児童（生徒）や一方的に話をしてコミュニケーションが苦手な児童（生徒）はいますか？」と尋ねると、ある学校ではほとんどの先生が手を挙げられました。

「特別支援教育」という言葉から、特別なことであると通常学級には関係のないことだと思われる方がいらっしやるかもしれませんが、決して特別なことではありません。



一人一人の子どもの教育的ニーズを考えるとという視点から、すべての子どもにとって有効に必要な考え方だと思います。

今回、大学院での研修を積むことで、自分自身がこれまでとは違った観点から特別支援教育について考えられるのではないかと楽しみにしています。教職大学院で共に学ぶ仲間がいることを励みとして、テーマは違っていても互いに刺激しながら研究を進めていきたいと思っています。

坂本 里美

さかもと さとみ

(啓新高等学校)

坂本先生は、教育学研究科学校教育専攻夜間主・学校改革実践研究コースの2年生です。このコースは教職大学院（教職開発専攻）の基礎になったものであり、教職大学院の開設後は、在学者の修了をもって存続しなくなります。啓新高等学校は、引き続き教職大学院の拠点校の一つとなり、他のスクールリーダー養成コースの院生と同様な形で、教職大学院の担当教員が継続的にかかわっています。このような経緯があり、今回、自己紹介をお願いしました。（編集部）

啓新高等学校17年目の坂本です。学校では生活文化科の3年生の担任をしています。校務分掌は生活指導部で生徒達たちに毎日らみを効かせています。

昨年度は何が何だか分からないまま、いろいろな方の実践を聞かせていただき、すごいなと思う日々でしたが、今年度は自分の番だと思うと、ただただ焦りだけが先行し、毎日自己嫌悪に陥っております。

今までの授業については、被服構成などの専門教科に重点が置かれ、家庭基礎などの必修科目の授業は教科書の受け売りになっていました。

昨年度の試みは、暗中模索で手探りのまま終わってし



まいりました。

今年度は2学期に教科書の筋は通りながら実践を進め

ていこうと思っています。そのために、1学期中間考査後から自分の考えを書かせ、それを私がプリントにし、配布するという試みをやっていますが、次の時間までにパソコンで打ち込むという作業が思ったより、スピードと根気がある作業で辛いです。しかし、生徒に配布すると、クラス全員が同じ問いに対して、どのような意見を持っているかが分かるためか、配布後5分ほどは全員が真剣に読むという、今までには見られなかった光景が広がり新鮮でうれしいです。

これからはもう少し高度に、討論会ができるようになればと思っています。(どこまでできるか・・・)

クラスの中でじっと貝になっている(黙ることで自分を守ることを身に付けてしまった)生徒から、どう言葉を引き出すか(自ら発言する)、これが今回のテーマかもしれませぬ。

いろいろな意見を持ち、いろいろな思いを持っているはずなのに、「言えない」「言わない」生徒が、「言える」「言いたくなる」授業が展開できたらと思っています。

生徒自身が、これから自分で作っていくであろう家族について考え、問題点を探り、自分で解決できる力を養うという、希望を持っています。

毎回、森先生と松田先生には、思い付きで考えがうまくまとまっていないものを、きれいに整理し、授業に持って行けるものにしていただき、ありがとうございます。

高校だから、家庭科だからできる実践を模索し、生徒たちが知らないから使えない、知っているけど使い道を知らないではなく、知っているし、使い道も分かっているけど、使わない知識を授業に盛り込めるように、頑張っていきたいと思っています。



**平成21年度福井大学大学院 教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
学生募集 スケジュール**

出願期間	平成20年7月31日(木)～8月6日(水)
出願者対象の説明会	平成20年8月9日(土) 10:00～ アカデミーホール
選抜期日	平成20年8月30日(土) 9:00～ 教育地域科学部1号館
合格者発表	平成20年9月24日(水)
入学手続	平成20年12月上旬

問い合わせ先：福井大学学務部入試課

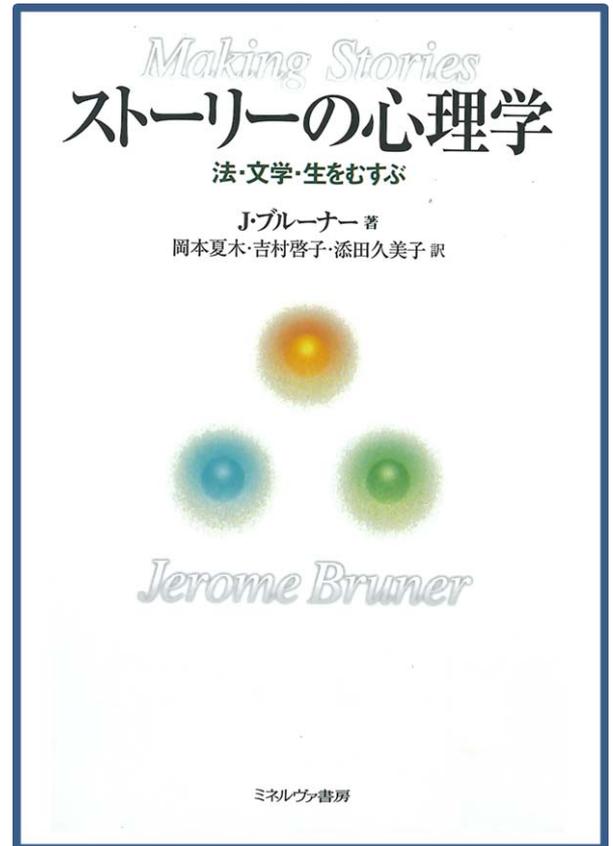
教育実践の記録・物語を考える

教育心理学を学んでこられた方なら誰もがご存じであろう。J・ブルーナーは(1915)は、教育心理学ばかりでなく、認知心理学、教育学、発達心理学どの分野を見てもお目にかかる巨人である。学生時代に「教育の過程(1960)」を読んだとき、「どの年齢の誰に対しても、どんなものでもそのままの形で教えることができる」というブルーナーの言葉は、新鮮そのものであった。科学の中核をなす基本的な観念を中心に教育を編成すればよいのである。レディネスという発達の発想に縛られ、閉塞気味のであった私には、霧が吹き飛ぶような感じがした。研究室の外に出よう。子どもとかかわり、子どものつまずきを解決しよう。私が事象の科学的な中核概念さえ抽出できれば、子どもを支えることができる。今にしてみれば酷い独善なのだが、視界が開けた思いがしていた。

しかし、しばらくして「教育の相互性」や「学びと自己形成」「生涯発達」「治療では解決しない障害」「思考と語りの関係」「行動の自己調整」といった課題に直面した。子どもは、与えられた知識をそのまま蓄積するのではない。自己の文脈の中で語りという人間関係を経て再構成し、そして初めて自己を調整できる知に変貌する。同時に、生活世界の見方や参画の仕方をも変えてしまう。そんなことを考えているころは、ブルーナーのことはすっかり忘れていた。過去の人のような気がしていた。

ところが、結局のところブルーナーの後追いをしていたのではないかと、気付かされたのは40歳も過ぎてからのことであった。ブルーナーは60歳過ぎから変貌していた。「心を探して-ブルーナー自伝(1983)」（1993年田中一彦訳）「可能世界の心理(1986)」（1998年田中一彦訳）「意味の復権-フォークサイコロジーに向けて(1990)」（1999年岡本夏木他訳）「教育という文化(1996)」（2004年岡本夏木他訳）。1990年代になって翻訳が続々と出るようになる。最初、「意味」や「物語」というような自分の関心事で手にした本が、あのブルーナーの書であったことは息も詰まるような驚きであった。

「心理学の中心となる概念は「意味」であり、「意味構築」の過程の解明にあるのであって、この過程を「情報処理」のみに還元してはならない。」「自然科学に代表される実証による真理の検証や一般化を目指す『論理-科学モード』と、重層的で多面的な人間の意味を扱う『物語モード』がある。」ブルーナーのどの言葉も豹変ではなかった。「教育の過程」を著した認知心理学者で教育学者であるブルーナーが自らの歩みを意味付け、たどるものであった。「ストーリーの心理学 法・文学・生を結ぶ」岡本夏木他訳(2007)は、2002年に書かれた最新の著である。ナラティブとはどのようなものなのかについて、法的なナラティブと文学的なナラティブを対比しながら論じている。ナラティブが特定の意図と視点からなされること、ナラティブは象徴的に一般化され比喩として存在論的な意味を創造し自覚させること。どの指摘も教育における記録を重視し、記録と語りが教師の自己形成になくてはならないものと考える私には、深く響く言葉である。教師の持つ知識・技能は、論理-科学的モードで蓄積されるものではない。教師の知識・技能は物語モードを介して、範例として位置付き、その日々の更新を通して形成されるものであることを再度確信させてくれる著である。(松木 健一)



報道ファイル

福井新聞社提供

+(25) 地 域 2008年(平成20年)6月8日(日曜日)



学校全体でエネ教育を

敦賀国際フォーラム 県内2小中が報告

日本原子力研究開発機構の第六回敦賀国際エネルギーフォーラム(福井新聞社後援)二日目は七日、敦賀市の県若狭湾エネルギー研究センターで開かれた。本県や米岡、韓国などのエネルギー環境教育の取り組みが報告され、本県の二教諭は同教育について「理科だ

学校でのエネルギー教育について発表する金津中の荒川教諭「七日、敦賀市の県若狭湾エネルギー研究センター」

原子力関係施設の協力を得て授業を行っている敦賀市松原小の河合智之教諭は、地球温暖化を調べる学習や手回し発電機を使うことで「節電やエネルギーの節約に取

けでなく、科目を問わずに学校全体で取り組むべきだ」と強調した。

金津中の荒川誠教諭は「今の子どもを取り巻く社会全体に『なぜ』という感覚がない」と指摘。学校で水や塩化ナトリウムの電気分解実験を行っていることを紹介し「地球温暖化などの環境問題を解決するのも科学技術。本県の子どもたちは、生活と連携させたエネルギー環境教育が必要」とした。

このほかスウェーデン、米岡、韓国の高校教諭も取り組みを報告。韓国のシン・ハクスン教諭は、環境問題について子どもたちがディベートを行い、カリキュラムに反映させていることなどを紹介した。

+(3) 福井ワイド 2008年(平成20年)6月15日(日曜日)



園児に心響く体験を 福井大附属幼で公開保育

「ひまわり、ひまわり、ひまわりを眺めると、花壇の花も葉もつうを研究テーマに保育実習は心に響く体験と見え、ふしと色水を作る「水遊び」をする園児いた。福井大附属幼稚園で十四日、福井大附属幼稚園で公開保育が行われた。園児は「水遊び」や「色水作り」などの体験活動を通じて、自然の恵みや生命の不思議さを感じ、思いを伝えていく保育のあり方を考えた。

「ひまわり」は本年、リレーをしたり、味方を見つめていた。

会を開き、研究の徹底説明や質疑応答などを通して理解を深めた。

Schedule

- | | | | |
|------------------|---------------------------------------|-------------------|------------------------|
| 7/12 sat | 合同カンファレンス (9:30-12:30) | 8/ 4 mon - 6 wed | 夏の集中講座 2a (9:30-17:00) |
| 7/22 tue -24 thu | 夏の集中講座 1a (9:30-17:00) | 8/ 6 wed - 8 fri | 夏の集中講座 2b (9:30-17:00) |
| 7/29 tue -31 thu | 夏の集中講座 1b (9:30-17:00) | 8/18 mon - 20wed | 夏の集中講座 3a (9:30-17:00) |
| 8/1 fri - 2 sat | 教育のアクションリサーチ研究会
(熱海：東京大学主催 (任意参加)) | 8/20 wed - 22 fri | 夏の集中講座 3b (9:30-17:00) |
- 集中講座は1・2・3それぞれ ab どちらか選択 (ab の組合せ自由)

【編集後記】 ニュースレター第5号が発刊される運びとなりました。本号では、附属中学校と拠点校での研究集会での報告がされています。報告では、「子どもの学びを見取る」ことの奥深さ、「見取った学び」を交流することの大切さが、実感を含めて述べられています。いずれ同じ文献のレビューの交流などもできたらおもしろいですね。(八田幸恵)

教職大学院 Newsletter No.5
2008.06.28
編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
Team4: 伊禮三之・石井パークマン麻子・
松木健一・松田淑子・八田幸恵
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp